



Title	アメリカ20世紀美術研究ニューヨーク近代美術館創設館長アルフレッド・H・バール、Jr. の思想を中心に
Author(s)	大坪, 健二
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49126
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	大坪健二
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第21472号
学位授与年月日	平成19年5月10日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	アメリカ20世紀美術研究 ニューヨーク近代美術館創設館長アルフレッド・H・バール、Jr. の思想を中心に
論文審査委員	(主査) 教授 上倉庸敬 (副査) 教授 藤田治彦 教授 圈府寺司

論文内容の要旨

本論文は、アメリカの現代美術とくに抽象表現主義の成立を軸に、20世紀前半のニューヨークで誕生した「近代美術館 Museum of Modern Art, New York」の美術館活動に関係づけて、アメリカ現代美術史を再構成しようという試みである。A4判横書、本文170頁に参考資料11頁を付して全181頁、400字詰め原稿用紙ならば約540枚に換算できる。

構成は「序 アメリカ現代美術前史」、「第I部 ニューヨーク近代美術館設立館長アルフレッド・H・バール、Jr. の思想」、「第II部 アルフレッド・H・バール、Jr. とニューヨーク近代美術館コレクションの形成」、「第III部 アメリカ20世紀美術 歴史と作品」、「資料 アルフレッド・H・バール、Jr. 年譜」となっている。

ヨーロッパの近代美術 Modern Arts は、ようやく20世紀初頭になって、アメリカに紹介されはじめた。以後アメリカ美術は、伝統を墨守するナショナリズムと、ヨーロッパ近代美術の影響を受けたモダニズムが競合するなかで、さまざまな様相を開拓する。1929年創立のニューヨーク近代美術館(MoMA)は当初から、ヨーロッパの現代美術を購入しては独自な美術観にしたがって展覧会を開催してきた。そこで呈示されたモダンアートの歴史は、アメリカ美術の主たる二つの潮流それに、プラス・マイナスいずれとも考えられる微妙な影響をあたえてきた。MoMAの中心にいて大きな手腕を発揮したのが、創設時から館長をつとめたアルフレッド・H・バール・Jr. である。

バール・Jr. は、プリンストン大学在学中、歴史学者チャールズ・ルーファス・モーレイから中世史を学び、その研究方法を現代美術史に適用したと思われる。作品の蒐集および展覧会は、絵画・彫刻など狭義の美術のみならず、建築、デザイン、写真などといった分野に広がり、斬新な近代(現代)美術史を構築することになった。

アメリカ美術史上、特筆すべき MoMA の展覧会は、ともに1936年に開催された『キュビズムと抽象美術』展と『幻想芸術、ダダ、シュールレアリズム』展である。両展覧会をとおして、近代ヨーロッパの美術は、当時の2大アヴァンギャルド、抽象美術とシュールレアリズムに収斂するという歴史觀が、アメリカでまた世界で、確固として受容されることになった。その結果、アメリカの最先端に立つ美術作家たちは、抽象美術とシュールレアリズムを二つながら対極に見据えて自己の活動を模索はじめ、1945年の第2次世界大戦後まもなく、アメリカ抽象表現主義という、個性に溢れた画期的芸術運動を生みだした。

MoMA およびバール・Jr. は抽象表現主義に対応できず、それを正しく評価することができなかつたと、これまでしばしば非難されてきたが、むしろ MoMA およびバール・Jr. の、それまでに類を見ない美術館活動がアメリカ抽象

表現主義を生んだといってよい。こうした視点に立てば、ジャクソン・ポロックからジャスパー・ジョーンズをへて、フランク・ステラまでを、統一のとれた一貫する史的展望のもとにおさめることができる。

論文審査の結果の要旨

現代美術を論じるに際して、第2次大戦後のアメリカ美術を外すことはできない。本論文は、アメリカ現代美術の成立過程ならびにその意義を問うが、20世紀前半に誕生する近代美術館ことにニューヨーク近代美術館（MoMA）が果たした美術史上また美術啓蒙上の役割に着目する。立脚した観点は、論の始まりから終わりまで少しもぶれることなく、前史にあたる19世紀、中心となる20世紀、さらに21世紀を展望する現代へ、首尾ととのったアメリカ美術史がみごとに構築されている。

アメリカ現代芸術を論じること、その前史を考察すること、MoMAの活動原理を解明すること、こうした各々の試みは従来もなかつたわけではない。しかし、独自な美術史を示唆し美術の普及につとめる美術館活動の帰結という見かたから、前述3点を総合してアメリカ現代美術史に挑んだ試論はいまだかつて存在しない。論者は、現代美術の蒐集で日本屈指の美術館に準備段階から長年、勤務してきた。学芸員としての視点と見識が集大成された論文といえるであろう。

アルフヒッド・H・バール・Jr. は、1929年の創設時にMoMAの館長であり、降格されてもなお1967年までMoMAに在籍しつづけた。その足跡を論者は、さまざま1次資料、2次文献を駆使して綿密に追い、美術館内部の力関係のなかで、バール・Jr. の活動の実態を浮かびあがらせる。実態解明の手際は、論者の実体験に裏打ちされて説得力に富み、目から鱗が落ちるような結論が導きだされる。バール・Jr. の開いた二つの展覧会が基になって、アメリカ固有の主題が、シュールレアリズムと抽象美術、双方から掘り下げられ、抽象表現主義に結実したという論旨は、含蓄ゆたかな、あたらしいアメリカ美術史を提出している。

かつてないアメリカ現代美術史は構築されたものの、バール・Jr. の思想究明に新鮮味は乏しく、近年の研究成果が存分に利用されているとはいがたい。さらに現代美術を論じる以上、「modern」の概念についても踏みこんだ解釈を聞きたいところであるが、慎重すぎて、新たな地平を拓くには至っていない。

期待が満たされない憾みは残るが、こうした過剰な期待を抱かせるほど充実しているということである。まぎれもなく、アメリカ現代美術に関する卓抜な論叢であって、博士（文学）の学位に十分ふさわしいと認定する。